

子猫

寺田寅彦

青空文庫

これまでかつて猫^{ねこ}というもののいた事のない私の家庭に、去年の夏はじめ偶然の機会から急に二匹の猫がはいって来て、それが私の家族の日常生活の上にかなりに鮮明な存在の影を映しはじめた。それは単に小さな子供らの愛撫^{あいぶ}もしくは玩弄^{がんろう}の目的物ができたといふばかりでなく、私自身の内部生活にもなんらかのかすかな光のようなものを投げ込んだように思われた。

このような小動物の性情にすでに現われている個性の分化がまず私を驚かせた。物を言わない獣類と人間との間に起こりうる情緒の反応の機微なのに再び驚かされた。そうしていつのまにかこの二匹の猫は私の目の前に立派に人格化されて、私の家族の一部としての存在を認められるようになってしまった。

二匹というのは雌の「三毛」と雄の「たま」とである。三毛は去年の春生まれで、玉のほうは二三か月おそらく生まれた。宅へもらわされて来たころはまだほんとうの子猫であつたが、わずかな月日の間にもう立派な親猫になつてしまつた。いつまでも子猫であつてほしいという子供らの願望を追い越して容赦もなく生長して行つた。

三毛は神経が鋭敏であるだけにどこか気むずかしくてそしてわがままでぜいたくである。

そしてすべての挙動にどことなく典雅のふうがある。おそらくあらゆる猫族の特性を最も顕著に備えた、言わば最も猫らしい猫の中の雌猫らしい雌猫であるかもしない。実際よくねずみを捕つて来た。家の中にはとうからねずみの影は絶えているらしいのに、どこからか大小いろいろのねずみをくわえて来た。しかし必ずしもそれを食うのではなく、そのままに打ちすてておいてあるのを、玉が失敬して片をつける事もあるようだし、また人間のわれわれが糸で縛つて交番へ届ける事もあつた。生存に直接緊要な本能の表現が、猫の場合はらもうすでに明白な分化を遂げて、言わば一種の「遊戯」に変化しているのは注意すべき事だと思つたりした。

玉のほうは三毛とは反対に神經が遲鈍で、おひとよしであると同時に、挙動がなんとか無骨で素朴そぼくであった。どうかするとむしろ犬のある特性を思い出させるところがあつた。うち宅へ来た当座は下性げしょうが悪くて、食い意地がきたなくて、むやみにがつがつしていたので、女性の家族の間では特に評判がよくなかった。それで自然にごちそうのいい部分は三毛のほうに与えられて、残りの質の悪い分け前がいつでも玉に割り当てられるようになつていた。しかし不思議なものでこの粗野な玉の食い物に対する趣味はいつとなしに向上して行つて、同時にあのあまりに見苦しいほどに強かつた食欲もだんだん尋常になつて行つた。

拳動もいくらかは鷹揚らしいところができたが、それでも生まれついた無骨さはそう容易には消えそうもない。たとえば障子の切り穴を抜ける時にも、三毛だとからだのどの部分も障子の骨にさわる事なしに、するりと音もなくおどり抜けて、向こう側におり立つ足音もほとんど聞こえぬくらいに柔らかであるが、それが玉だとまるで様子がちがう。腹だか背だかあるいはあと足だか、どこかしらきつと障子の骨にぶつかつてはげしい音を立て、そして足音高く縁側に、おりるというよりむしろ落ちるのである。この区別はあるいは一般に雌雄の区別に相当する共通のものであるかどうか私にはわからない。しかし考えてみると人間の同じ性のものの中でもこれに似た区別がかなりに著しい。ちょっと一つの部屋から隣の部屋へ行く時にも必ず間の唐紙からかみにぶつかり、縁側を歩く時にも勇ましい足音を立てないでは歩かない人と、また気味の悪いほどに物音を立てない人とがある事を考えてみると、三毛と玉との場合にもおもな差別はやはり性の相違ばかりではなくて個性の差に帰せらるべきものかもしれない。

ことしの春寒のころになつてから三毛の生活に著しい変化が起つて來た。それまではほとんどうちをあける事のなかつたのが、毎日のように外出をはじめた。従来はよその猫ねこを見るとおかしいほどに恐れて敵意を示していたのが、どうした事か見知らぬ猫と庭のすみ

をあるいているのを見かける事もあつた。一日あるいはどうかするとそれ以上も姿を隠す事があつた。始めはもしや猫殺しの手にでもかかつたのではないかと心配して近所じゅうを尋ねさせたりした事もあつたが、そうしていると夜明け方などにふいと帰つて来た。平生はつやつやしい毛色が妙に薄ぎたなくよごれて、顔もいつとなく目立つてやせて、目つきが険しくなつて來た。そして食欲も著しく減退した。

うちの三毛が変などろぼう猫と隣の屋根でけんかをしていたというような報告を子供の口から聞かされる事もあつた。

私はなんとなしに恐ろしいような気がした。自分では何事も知らない間に、この可憐なかれん小動物の肉体の内部に、不可抗な「自然」の命令で、避け難い変化が起こりつつあつた。そういう事とは夢にも知らない彼女は、だからだに襲いかかる不可思議な威力の圧迫に恐れおののきながら、春寒の霜の夜に知らぬ軒ばをさまよい歩いているのであつた。私は今さらのように自然の方則の恐ろしさを感じると同時に、その恐ろしさをさえ何のためとも自覚し得ない猫を哀れに思うのであつた。

そのうちにまたいつとなく三毛の生活は以前のように平静になつたが、その時にはもう今までの子猫こねこではなくて立派に一人前の「母」になつていた。

いつも出入りする障子の穴が、彼女のためには日々ことに狭くなつて行くのであつた。入りのたびごとにその重い腹部をかなりに強く障子にぶつつけた。どうかすると無作法な玉よりもはげしい音を立ててやつとくぐり抜ける事もあつた。人間でさえも、ほんの少しばかりいつもより^{つば}鍔の広い^{むぎわらばう}麦藁帽をかぶるともう見当がちがつて、いろいろなものにぶつかるくらいであるから、いかに神経の鋭敏な三毛でも日々に進行するからだの変化に適応して運動を調節する事はできなかつたにちがいない。それはとにかく私はそれがために胎児や母体に何か悪い影響がありはしないかという気がしたが、しかし別にどうするでもなくそのままにうつちやつておいた。

どんな子猫が生まれるだろうかという事が私の子供らの間にしばしば問題になつていた。いろいろな勝手な希望も持ち出された。そしてめいめいの小さな頭にやがてきたるべき奇蹟^{せき}の日を描いてそれを待ち遠しがつてゐるのであつた。今度生まれたのは全部うちで飼つてほしいという願いを両親に提出するのもあつた。

ある日家族の大部分は博覧会見物に出かけた。私は留守番をして珍しく静かな階下の居室で仕事をしていたが、いつもとはちがつて鳴き立てる三毛の声が耳についた。食物をねだる時や、外から帰つて来る主人を見かけてなくのとは少し様子がちがつてゐた。そして

なんとなく不安で落ち着き得ないといったようなふうで、私のそばへ来るかと思うと縁側に出たり、また納戸なんどの中に何物かを捜すようにさまよつては哀れな鳴き声を立てていた。

かつて経験のない私にも、このいつにない三毛の挙動の意味は明らかに直感された。そして困つたものだと思つた。妻はいないし、うちにいる私の母も年の行かぬ下女もいざれも猫ねこの出産に際してとるべき適当の処置についてはなんらの予備知識も持ち合わせなかつたのである。

ともかくも古い柳行李やなぎごうりのふたに古い座ぶとんを入れたのを茶の間の簾たんすの影に用意してその中に三毛をすわらせた。しかし平生からそのすわり所や寝所に対してひどく気むずかしいこの猫は、そのような慣れない産室に一刻も落ち着いて寝てはいなかつた。そして物につかれたようにそこらじゆうをうろついていた。

午過ぎに二階へ上がつていたら、階段の下から下女が大きな声を立てて猫の異状を訴えて來た。おりて来て見ると、三毛は居間の縁の下で、土ぼこりにまみれたねずみ色の団塊を一生懸命でなめころがしていた。それはほんんど生きているとは思われない海鼠なまこのような団塊であつたが、時々見かけに似合わぬ甲かんだか高いうぶ声をあげて鳴いていた。

三毛は全く途方にくれてゐるよう見えた。赤子の首筋をくわえて庭のほうへ行こうと

しているかと思うと、途中で地上におろしてまたなめころがしている。どうとうその土にまみれた、氣味悪くぬれよごれたものをくわえて私たちの居間に持ち込んで来た。そして私の座ぶとんの上へおろして、その上で人間ならば産婆のすべき初生児の操作法を行なおうとするのである。私は急いで例の柳行李のふたを持つて来て母子をその中に安置したが、ちよつとの間もそこにはいてくれないで、すぐにまた座敷じゅうを引きずり歩くのであった。

当惑した私は裏の物置きへその行李を持ち込んで行つて、そこに母子を閉じ込めてしまつた、残酷なような氣もしたが、家じゅうの置をよこされるのは私には堪え難い不愉快であつた。

物置きの戸をはげしく引っかく音がすると思つてゐると、突然高い無双窓に三毛の姿が現われた。子猫こねこをくわえたままに突つ立ち上がつて窓のすきまから出ようとして狂気のようにもがいているさまはほんとうに物すごいようであつた。その時の三毛の姿勢と恐ろしい目つきとは今でも忘れる事のできないよう私に焼きつけられた。

急いで戸を開けてやつた。よく見ると、子猫のからだがまつ黒になつてゐるし、三毛の四つ足もちようど脚絆きやはんをはいたように黒くなつてゐる。

このあいだじゅう板塀いたべいの土台を塗るために使った防腐塗料をバケツに入れたのが物置きの窓の下においてあつた。その中に子猫を取り落としたものと思われた。頭から油をあびた子猫はもう明らかに呼吸が止まつているように見えたが、それでもまだかすかに認められるほどのうごめきを示していた。

むごたらしい人間の私は、三毛がこの防腐剤にまみれた足と子猫で家じゅうの畳をよごしあるく事に何よりも当惑したので、すぐに三毛をかかえて風呂場ふろばにはいって石鹼せっけんで洗滌んじようを始めたが、このねばねばした油が密生した毛の中に滲透しんとうしたのはなかなか容易にはどれそうもなかつた。

そのうちにもう生命の影も認められないようになつた子猫はすぐに裏庭の桃の木の下に埋めた。埋めてしまつた後に、もしやまだ生きていたのではなかつたかという不安な心持ちがして来て非常にいやな気がした。しかしもう一度それを掘りかえして見るだけの勇気はどうしてもなかつた。黒い油にまみれたあのおぞましい団塊に再び生命が復かえつて来ようとも思われなかつた。

そのうちに一同が帰宅して留守中に起こつた非常な事件に関する私からの報告を聞いているうちに、三毛はまた第二第三の分娩ぶんべんを始めた。私はもうすべての始末を妻に託して

二階にあがつた。机の前にすわつてやつと落ち着いてみると、たださえ病に弱つてゐる自分の神経が異常な興奮のためにひどく疲れてゐるのに気がついた。

あとから生まれた三四の子猫はみんなまもなく死んでしまつた。物置きに入れられてから三毛のはげしい肉体と精神の劇動がこの死産の原因になつたのではないかと疑つてみた。この疑いはいつまでも私の心の奥のほうに小さな傷あとのようになつて残つてゐる。桃の木の下に三四の同胞とともに眠つてゐるあの子猫に関する一種の不安もおそらくいつまでも私の良心に軽い刺激となつて残るだろう。

産後の経過が尋常でなかつた。三毛は全く食欲を失つて、物憂げに目をしょぼしょぼさせながら一日背を丸くしてすわつてゐた。さわつて見るとからだじゅうの筋肉が細かくおののいているのが感ぜられた。これは打ち捨てておいては危険だと思われたので、すぐに近所の家畜病院へ連れて行かせた。胎児がまだ残つてゐるらしいから手術をして、そしてしばらく入院させたほうがいいという事であつた。

十日ばかりの入院中を毎日のようにかわるがわる子供らが見舞いに行つた。それが帰つて來ると、三毛の様子がどういうふうであつたかを聞いてみると、いつも要領を得る事はできなかつた。あまり頻繁に見に來ると猫の神経を刺激して病氣にさわると言つて医師

から警告を受けて帰つたものもあった。

物を言わぬ家畜を預かつて治療を施す医者の職業は考えてみるとほど神聖なもののような気がした。入院中に受けた待遇についてなんらの判断も記憶も持ち得ないし、また帰宅しても人間に何事も話す事のできないような患者に忠実親切な治療を施すという事があたりまえではあるがなんとなく美しい事のように思われた。

退院後もしばらく薬をもらつていた。その散薬の包み袋が人間のと全く同じであるが、名前の所には吉村氏愛猫としてその下に活字で「号」の字があつた。おそらく「三毛号」とするところを略したのだろう。とにかくそれからしばらくは愛猫号という三毛のあだ名が子供らの間に流行していた。

ある日学校から帰つた子供が見慣れぬ子猫を抱いて来た。家の門前にだれかが捨てて行つたものらしい。白い黒ぶちのある、そしてしつぽの長い種類のものであつた。縁側を歩かせるとまだ足が不たしかで、羽二重のようになめらかな躊躇は力なく板の上をずるずるべつた。三毛を連れて来てつき合わせると三毛のほうが非常に驚き恐れて背筋の毛を逆立てた。しかしそれから数時間の後に行つて見ると、だれかが押し入れの中にオルガンの腰掛けを横にして作つてやつた穴ぼこの中に三毛が横に長くねそべつて、その乳房にこの子

猫が食いついていた。子猫はポロ／＼とかすかに咽喉を鳴らし、三毛はクルークルーと今までついぞ聞いた事のない声を出して子猫の頭と言わず背と言わずなめ回していた。一度目ざめんとして中止されていた母性が、この知らぬよその子猫によつて一時に呼びさまされたものと思われた。私は子を失つた親のために、また親を失つた子のために何がなに胸の柔らぐような満足の感じを禁じる事ができなかつた。

三毛の頭にはこの親なし子のちびと自分の産んだ子との区別などはわからうはずはなかつた。そしてただ本能の命ずるがままに、全く自分の満足のためにのみ、この養児をはぐくんでいたに相違ない。しかしわれわれ人間の目で見てはどうしてもそれは思いかねた。熱い愛情にむせんででもいるような声でクルークルーと鳴きながら子猫をなめているのを見ていると、つい引き込まれるように柔らかな情緒の雰囲気ふんいきにつつまれる。そして人間の場合とこの動物の場合との区別に関する学説などがすべてばからしいどうでもいい事のようと思われてならなかつた。

どうかすると私はこのちびが、死んだ三毛の実子のうちの一つであるような幻覚にとらえられる事があつた。人間の科学に照らせばそれは明白に不可能な事であるが、しかし猫ねこの精神の世界ではたしかにこれは死児の再生と言つても間違ひではない。人間の精神の世

界が ^{デイメンジヨン} N 元 のものとすれば、「記憶」というものの欠けている猫の世界は ^{デイメンジヨン} (N-1) 元 のものと見られない事もない。

ちびは大きくなるにつれてかわいくなつて行つた。彼は三毛にも玉にも長いしっぽをもつてると同時に、また三毛にも玉にもない性情のある一面を備えていた。たとえば三毛が昔かたぎの若い母親で、玉が田舎出の書生だとすれば、ちびには都会の山の手の坊ちゃんのようなところがあつた。どこか才はじけたような、しかしそれがためのいやみのない愛くるしさがあつた。

小さな背を立てて、長いしっぽをへの字に曲げて、よく養母の三毛にけんかをいどんだが、三毛のほうでは母親らしくいいかげんにあやしていた。あまりうるさくなると相手になつてかなり手荒く子猫の首をしめつけてころがしておいて逃げ出す事もあつた。しかしそんな場合に口きたなくののしらないだけでも人間の母親のある階級のものよりははるかに感じがよかつた。また子猫のほうでもどんなにひどくされてもいじけたり、すねたりしない点がわれわれの子供よりもずっと立派なように思われた。

もう一人立ちができるようになつて、ちびは親戚の内へもらわれて行つた。迎いの爺やが連れに来た時に、子供らは子猫を三毛のそばへ連れて行つて、別れでも惜しませるつ

もりで日々に何か言つていたが、こればかりはなんの事とも理解されようはずはなかつた。ちびが永久に去つた後に三毛はこの世界に何事も起こらなかつたかのように縁側の柱の下にしゃがんで気持ちよさそうに目をしょぼしょぼさせていた。それが罪業の深いわれわれ人間には妙にさびしいものに見えるのであつた。それから一両日の間は時々子猫を捜すかと思われるような挙動を見せた事もあつたが、それもただそれきりで、やがて私の家の猫にはのどかな平和の日が帰つて來た。それと同時に、ほとんど忘れられかかつていた玉の存在が明らかになつて來た。

子猫に対し玉は「伯父さん」というあだ名をつけられていた。そしてはなはだ冷淡でそつけない伯父さんとして、いつもながら不利な批評の焦点になつていていたが、もうそれも過去になつて、彼もまたもとの大きな子猫になつてしまつた。子猫に対し見るといかにも分別のある母親らしく見えていた三毛ですらも、やはりそうであつた。いちばん小さい私の子供に引っかかえられて逃げようとしてもがきながら鳴いているところを見たりすると、なおさらそういうディスイリュージョンを感じるのであつた。

夏の末ごろになつて三毛は二度目の産をした。今度も偶然なコインシデンスで、ちょうど妻が子供を連れて出かけるところであつたが、三毛の様子がどうも変であつたから少し外出

を見合わして看護させた。納戸のすみの薄暗い所へいつかの行李を置いてその中に寝かせ、そしてそろそろ腹をなでてやるとはげしく咽喉を鳴らして喜んだそうである、そしてまもなく安々と四匹の子猫を分娩した。

人間のこしらえてやつた寝床ではどうしても安心ができないと見えて、母猫はいつのまにか納戸の高い棚の奥に四匹をくわえ込んだ。子供らはいくら止めても聞かないで、高い踏み台を持ち出してそれをのぞきに行くのであった。私はなんとはなしにチエホフの小品にある子猫と子供の話を思い浮かべて、あまりきびしくそれをとがめる気にもなれなかつた。

子猫の目のあきかかるころになつてから、時々棚の上からおろして畳の上をはい回らせた。そういう時は家内じゅうのものが寄り集まつてこの大きな奇蹟を環視した。そのような事を繰り返す日ごと日ごとに、おぼつかない足のはこびが確かになつて行くのが目に立つて見えた。単純な感覚の集合から経験と知識が構成されて行く道筋はおそらく人間の赤子の場合と似たものではあるまいかと思われた。そしてその進歩が人間に比べて驚くべく急速である事も拒み難い。このように知能の漸近線の近い動物のほうが、それの遠い人間に比べてそれに近づく速度の早いという事実はかなり注意すべき事だと思つたりした。

物質に関する科学の領域にはこれに似た例はまれであろう。

二匹の子猫はだいたい三毛に似た毛色をしていた。一つを「太郎」もう一つを「次郎」と呼んでいた。あの二匹は玉のような赤黄色いのと、灰色と茶の縞のようないわゆるどこか猿さるぐまに似ていたからだれかがそう名づけたのである。そうして背中の斑が虎のようだから「鶴ぬえ」だというものもあった。この鶴だけが雌で、他の三匹はいずれも男性であつた。

生長するにつれて四匹の個性の相違が目について來た。太郎はおつとりして愛嬌あいきようが、なんとなく少し無骨で鈍なところがあつた。赤は顔つきからして神経的な狐きつねのようないわゆる病病おこびようがあるいは用心深くて、子供らしいところが少なかつた。おさるは雌だけにどこか雌らしいところがあつて、つかまりでもするとけたたましい悲鳴をあげて人を驚かした。

玉をつれて来て子猫の群れへ入れると、赤と次郎はひどくおびえて背を丸く立てて固くしゃちこばつたが、太郎とおさるはじきに慣れて平氣でいた。玉のほうは相変わらずきわ

めて冷淡な伯父さんで、めんどうくさがつてすぐにどこかへ逃げて行つてしまつた。

四匹の子猫に対する四人の子供の感情にもやはりいろいろの差別があつた。これはどうする事もできない自然の理法であろう。愛憎はよくないと言つて愛憎のない世界がもしあつたらそれはどんなにさびしいものかもわからない。

子猫はそれぞれもらわれて行つた。太郎はあるデパートメントストアへ出でているという夫婦暮らしの家へ、次郎は少し遠方のあるおやしきへ、赤はひとり住みの御隠居さん所へ、最後におさるは近い電車通りの氷屋へそれぞれ片付いて行つた。私は記念にと思ってその前に四匹の寝ている姿を油絵の具でスケッチしておいたのが、今も書斎の棚の上にかかっている。まずい絵ではあるが、それを見るたびに私は何かしら心が柔らぐよう思う。

太郎の行つた家には多少の縁故があるので、幼い子供らは時々様子を見に行つた。おさるの片付いた氷屋も便宜がいいので通りがかりに見に行くそうである。秋になつてその氷屋は芋屋に変わつた。店先の框の日向に香箱を作つて居眠りしている姿を私も時々見かけ。前を通るたびには、つい店の中をのぞき込みたいような気がするのを自分でもおかしいと思う。

今でも時々家内では子猫のうわきが出る。そして猫にも免れ難い運命の順逆がいつでも問題になつた。このあいだ近所の泥溝に死んでいた衰れなのら猫の子も引き合いに出て、同じ運命から拾い上げられて三毛に養われ豊かな家にもらわれて行つたあのちびがいちばんの幸運だというものもあれば、御隠居さんばかりの家に行つた赤がいちばん楽でいいだろうというものもあつた。妻は特にかわいがつていた太郎がわりに好運でなかつた事を残念がつているらしかつたが、私はどういうものか芋屋の店先に眠つているおさるの運命の行く末に心を引かれた。

ある夜夜ふけての帰り道に芋屋の角まで来ると、路地のごみ箱のそばをそろそろ歩いているおさるの姿を見かけた。近づいて頭をなでてやると逃げようともしないでおとなしくなでられていた。背中がなんとなく骨立つていて、あまり光沢のないらしい毛の手ざわりも哀れであつた。

娘を片付けて後のある場合の「父」の心を思いながら私は月のおぼろな路地を抜けてほど近いわが家へ急いで行つた。

私は猫ねこに対して感ずるような純粹なあたたかい愛情を人間に對していだく事のできない

のを残念に思う。そういう事が可能になるためには私は人間より一段高い存在になる必要があるかもしれない。それはとてもできそうもないし、かりにそれができたとした時に私はおそらく超人の孤独と悲哀を感じなければなるまい。凡人の私はやはり子猫でもかわいがつて、そして人間は人間として尊敬し親しみ恐れはばかりあるいは憎むよりほかはないかもしない。

（大正十二年一月、女性）

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦隨筆集 第一巻」小宮豊隆編、岩波文庫、岩波書店

1947（昭和22）年9月10日第1刷発行

1964（昭和39）年1月16日第22刷改版発行

1997（平成9）年5月6日第70刷発行

入力：田辺浩昭

校正：かとうかおり

1999年11月17日公開

2003年10月22日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

子猫

寺田寅彦

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>